国際農業者交流協会の海外農業研修その1

──制度の概要と石井理事長のインタビュー──

主任研究員　室屋有宏

1　国際農業者交流協会について

日本農業の再生、また地域再生のためには意欲ある若者が多数就農するとともに、地域社会のリーダー的人材として活躍していくことが不可欠である。そのためには、高度な経営力、地域リーダーとしての理念や人間性等を養成する農業経営者教育機関の役割が重要である。

（社）国際農業者交流協会（以下「協会」、HPはwww.jaec.org）は、「農業」をキーワードに人材育成・国際交流・国際貢献を図るセンターとしての役割を発揮している公益法人である（主務官庁は外務省・農林水産省）。同協会は、海外への農業研修生派遣事業を行っていた（社）国際農友会と（社）農業研修生派米協会が1988年に統合し設立された。現在までに、前身組織を含め約１万４千名の青年農業者を海外研修に派遣している。また海外諸国（ASEAN、欧州諸国）から日本の農家へ農業研修生の受入れ等を行っているほか、海外の先進的な農業技術や考え方を農業関係者に提供するプログラムなどを実施している。

今回を含め３回にわたり、同協会の海外研修制度及び実際に研修に参加した方の経験や感想、その後の歩みについてレポートしたい。まず本稿では、協会の海外研修内容等を紹介したうえで、ご自身もアメリカで農業研修を経験された石井清協会理事長のインタビューを掲載する。

2　国際農業者交流協会の海外農業研修

協会の海外農業研修は、52年に始まった（社）国際農友会の農業実習生海外派遣事業にまで遡り、50年以上の長い歴史を有している。その間に国内外に蓄積したネットワークを活かしながら、将来の農業を担う若者（おおむね19～30歳独身男女）をアメリカや欧州諸国（デンマーク・ドイツ・スイス・オランダ）などの農業先進国へ派遣している。近年の研修先では、米国が65～70名、欧州が30～35名程度、合計で毎年100名ほどを派遣している。

米国派遣コースは約１年半の派遣期間のなかで、約４か月間の現地大学での学習と約13か月間の農場実習を効果的に組み合わせ、農産物市場・流通及び農業経営、英会話等を学ぶことができる（第１図）。

欧州派遣コースは対象国を１か国選び、農場での実地研修を主体に期間は約１年である。その間に語学研修、各国毎にセミナーや交流・体験事業等が用意されている。

また両コースとも農業の業種、派遣先農場等は、本人の意向を尊重して決められる他、研修の事前、事後のサポート体制も整備されている。なお海外農業研修の詳細は、HPの動画映像に詳しいので参照されたい。

研修費用については、現地での実習手当の

第1図　海外農業研修の現地スケジュール

資料　国際農業者交流協会

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。
農林中金総合研究所 http://www.nochuri.co.jp/

他、国・地方の農業関連団体から様々な経費支援を受けられる仕組みがある。また海外研修の事前準備として、日本で10か月ほど農業研修(研修先は海外研修OB農家)を行い、研修費用を積み立てるコースもある。

2012年度の海外農業研修生の募集は４月１日から始まる。詳しい情報については、協会HPに掲載されているので是非ご覧頂きたい。

3　海外農業研修は人間教育の場

石井理事長に当時経験された海外研修内容と研修を通じて得たもの、また研修に興味を持つ方へのメッセージを伺った。

―海外研修参加の経緯は？

農業高校を卒業後、農家の長男だったので当たり前のように就農し、ぶどう、柿、梨などの落葉果樹栽培に取り組んでいた。1961年、24歳のとき神奈川県の推薦を得て、第10回海外研修に応募、選抜された。当時はだいたい各県１名で全体では58名だった。選考は厳しく、25キロの砂袋を持ち上げるテストもあった。

―研修生活はいかがでしたか？

13日間の航海でサンフランシスコに到着した後、２週間ほどUCバークレーで研修した。その後バスチケットをもらい、ひとりで農場に行くときはパニックに近くて、１時間半くらいの時間が半日にも感じられた。人生で一番不安な瞬間だった(笑)。

研修先の北カルフォニアのユバ・シティ(Yuba City)の農場は、缶詰用の桃、アーモンド、プルーンを栽培していた。農場は全体で450エーカー（約182ha)ほど、圃場は１枚が20haくらいあった。農作業は収穫・選別、灌漑の整備など何でもやった。

作業は午前、午後５時間ずつだったが、その間に休憩がないのに驚いた。暑いときには華氏110度(摂氏約43度)にもなるため、水と岩塩を欠かさず摂った。

―研修で得たものは？

石井理事長

アメリカのことは知らなかったし、イメージを持って行かなかったが、人に恵まれて、日本だったら10年いても教育してもらえないくらい大きなものを全身で学べ、人生のためになった。

自分の性格は一人っ子で気ままなところがあったが、自然と仲間と助け合う気持ちが芽生えた。外国のいろいろな人達と仕事をしたから外国人コンプレックスがなくなり、どこに行くのも平気になった。情報を入手する感覚も身についたと思う。

―農業研修に参加するこれからの就農者・農業経営者に期待するところは？

外国農業を実践的に学ぶことが大前提になるが、その前に海外研修で多くの人と知りあい、人生の大きな節目にするという自覚が必要だ。農業経営を学ぶ機会は、人的関係を通じ後にもいくらでもできるだろう。

20代の若者にとって、１年なり１年半外国にいることは、人のつながりの大切さや信用してもらえる人間になること、などを学ぶ人間教育、人間形成の場として意義が大きい。

こうした基本的なことを学び、点と点をつなげてくことがのちのち大きな財産になる。また将来はリーダーとして地域をひっぱっていく役割があることも忘れて欲しくない。

（むろや　ありひろ）

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます。
農林中金総合研究所
http://www.nochuri.co.jp/